

2008年度学部1年生の就学・就業意識調査報告

A survey of 2008 about first-year college students' attitudes toward their academic or future occupational careers

影 山 陽 子¹⁾ 高 橋 進²⁾ 平 井 由美子²⁾

Yoko KAGEYAMA, Susumu TAKAHASHI and Yumiko HIRAI

Abstract

A career development course named 'Women and Work' has been offered as a required course for the first-year undergraduates of Japan Women's College of Physical Education since 2007. This is the first career development course included in the regular curriculum among the colleges of Physical Education. It aims to develop deeper awareness to work in our lives and offers an opportunity to consider possible career designs after graduation on all sides.

This paper reports the result of a cell phone survey of the students' attitudes towards schoolwork at college and future careers. We conducted the survey of the first-year students who took the course in 2008 in order to find what they intended to do when entering the college, what their present attitudes are toward studies at college and occupations in future and whether any changes might take place through learning this course or not. In the survey a communication system named C-Learning was applied. Students answered questionnaires on their own cell phones in the class at the beginning and the end of the term.

The results of the survey are as follows: First, the students tended to have selected the college after careful consideration to their future. Second, most of them generally contented with their college life and show earnest studying attitudes. However, the survey showed that among them there was a tendency to waver in their decision about the future career which they had when entering the college and feel some difficulties in trying to connect their academic career with vocational career in future.

The same survey will be made in 2009 and compare the results with tendencies of the students in 2008. In addition, we intend to let the students be aware of the close connection between the future life planning and the present schoolwork at college.

keywords: Japan Women's College of Physical Education, a career development course in the regular curriculum, awareness to work and a career design, questionnaires on cell phones

I. 序 論

日本女子体育大学は、2000年からこれまで就職希望者に対する就職率が9年連続で90%を超えている。超就職氷河期といわれた1999年以降の厳しい時代にもこのような数値を維持できていることは大変喜ばしいことである。

また、体育大学では初の試みであるキャリア科目の正規授業への導入も、2007年度から行われている。必修科目として「女性と仕事」が、選択科目として「社会の仕組みとキャリア形成」が、それぞれ開講さ

れ、正規授業を通して、学生にキャリアについて深く考える機会を提供している。

一般的に新卒者の就職をめぐるのは、社会情勢の厳しさのみならず、学生本人の就業意識が問題とされることも多い。社会情勢との関連が否めない部分があるものの、就職活動自体を敬遠することで就職の機会を逃してしまったり、あるいは、就職後に明確な理由を確認することもないまま、なんとなく離職をしてしまったりすることが起こっている。立教大学ビジネスクリエーター創出センターキャリアプロジェクトチーム（2005）においても、今後の日本の経済社会の発展を担う人材像、その育成方法、およびキャリア形成システムを研究する上で、現在の経済社会を担う人材が、そもそもどのようなキャリア意識を持ち、どのよ

1) 日本女子体育大学（講師）

2) 日本女子体育大学（教授）

うな状況におかれているのかを認識することが研究の出発点としてとりわけ重要であると明記されている。

本稿では、日本女子体育大学の学部1年生の就学意識・就業意識調査の結果を報告する。彼女たちがどのような就学意識を持って本学に入学してきたのか、そして、現在どのような就学・就業意識を持っているのかについて、まずは明らかにしたい。これは前述したようにキャリア科目の設置およびその研究に不可欠な情報と位置づけられるからである。また、正規授業を通してキャリアについて考える機会を提供することで、それらの意識に変化が表れるのかについても簡単な中間報告を行いたい。

将来的には本稿のような報告を数年続け、本学で実施されているキャリア科目の効果について詳しい検証を行うつもりである。その意味で今年度は中間報告的な意味を持つことを最初に断っておきたい。

Ⅱ. 「女性と仕事」授業の概要

本学では、2007年度より、「女性と仕事」という必修科目を、学部1年生を対象に開講している。「女性と仕事」の授業目的を以下に示す。

本学の教育理念に沿い、主体的な生き方を自ら形成

するキャリア形成の力を身につけさせることを目的とする。現代社会の変化に対応し、自分の生き方をデザインし、選択していく能力を養成するとともに、女性として「働くこと」「仕事」について明確な意識を持ち、4年間の学生生活に取り組む姿勢を確認させる。授業では、講師を迎えて自分らしい生き方をするさまざまな女性のキャリアを紹介し、最終的に学生各人が主体的な生き方をデザインするためのプランを作成する。

この目的に沿って、授業担当者らが本学に合わせた内容で以下のような講義・ゲストセッション・授業内ワーク等を設計し、授業を行った。

また、ゲストセッションのゲストおよび内容は以下のとおりであった。

自分らしい生き方 (1) では本学のOGであり、ラジオ局アナウンサーを経て現在人材教育の仕事をしている女性に「女性が働くこと」「キャリア形成」という観点から人生談を交えた講演をいただいた。自分らしい生き方 (2) (3) では、専攻毎にゲストを変えた。

自分らしい生き方 (2) では、スポーツ科学専攻および健康スポーツ学専攻向けには、教員志望の学生が多いことから、元中学校教員で現在教育学系大学院で学びながら、教員のためのカウンセリングを行ってい

回	タイトル	内 容
1	オリエンテーション 自分らしい生き方を学ぶ (1)	授業の目的や授業に関わる約束事についての説明・ゲストセッション「女性の仕事をめぐる環境」：女性が働くということについて話を聞く。
2・3	キャリア形成から見た女性の社会進出 (1) (2)	「人見絹枝に見るスポーツとキャリア形成」：キャリア形成という観点から人見絹枝を取りあげる。「社会環境と働く女性たち」：女性の社会進出の歩みと現在の女性を取り巻く社会状況について理解する。女性史年表を提示
4	自分を知る (1)	「自己分析とパーソナルヒストリー」：大学で学ぶ目的や将来の夢の実現のための自己分析やパーソナルヒストリーを作成する。
5	自分らしい生き方を学ぶ (2)	ゲストセッション「キャリアの実例紹介①」：キャリア経験豊富な社会人である女性を講師に招き、女性の生き方・働き方について学ぶ
6	自分らしい生き方を学ぶ (3)	ゲストセッション「キャリアの実例紹介②」：キャリア経験豊富な社会人である女性を講師に招き、女性の生き方・働き方について学ぶ
7	雇用形態とキャリア形成	「就業環境と雇用形態」：現代の若者や女性がおかれている就業環境の現実を理解し、「仕事・働くことの位置づけ」について考える。
8	キャリア形成とライフスタイル	「女性のライフコースとキャリア形成」：実現可能なライフデザインを描くために、女性のライフコースとワークライフバランスについて学ぶ。
9	キャリア形成と社会人基礎力	「社会が求める能力」：現在の社会に求められる能力について学ぶ。
10	本学で学ぶ力	「ニチジョウからへの気づき」：本学での学びを通して身につく力について学ぶ。
11	専門に関わる仕事と職業	「ニチジョウ生の現状と課題」：スポーツ・ダンス・健康・保育・福祉など専門に関わる職種や職業についての知識を深め、将来設計に生かす。
12	自分を知る (2)	「仕事への関心と適性」：これまで学んできたことを元に、自分の目標や進路について再設定をする
13・14	プレゼンテーション	「私のキャリアプラン」：自分のキャリアプランを発表し確認をする。また仲間のキャリアプランを良く聞くことによって世界を広げる。

る本学OGに教員の仕事および人生談について講演をいただいた。舞踊学専攻と幼児発達学専攻では、バレエと仕事を長年両立させながら米国留学をし、米国にて公認会計士の資格を取得し現在外資系会計事務所に勤める女性から、自分の好きなことをしながらキャリアアップランニングをしていくことについて人生談を交え講演をいただいた。

自分らしい生き方(3)では、スポーツ科学専攻および健康スポーツ学専攻向けには、やはり本学OGで大手自動車メーカーの販売部門において人事・人材育成の仕事をしている女性から、様々なライフイベントに対応しながらも女性が働き続けられるよう支援する「ポジティブ・アクション」について、また、仕事を続けながら出産育児を経験した人生談について講演をいただいた。舞踊学専攻と幼児発達学専攻では、自分の夢を叶えるために海外で起業し、その事業をしている女性から、就職活動時の不安や焦燥感などにも触れ、自分らしい生き方をすることについて人生談を交え講演をいただいた。

ゲストセッションに対する学生たちの反応は極めて高く、好評であった。人生における様々な体験をライブで、授業における学習項目とも関連させながら聞くことは、強い印象を与えるようである。感想を記入するワークシートには、多くのメモ書きおよび感想文が書かれた。感激した様子を伝える感想も多くみられた。

Ⅲ. 調査の概要

1. 対象者

2008年度「女性と仕事」の受講者を対象とした。受講者は2008年度学部1年生であり(2007年度の再履修生も含むが、その数は極少数である)、約450名、全員が女性であった。

2. 調査時期

調査は2回行われた。1回目は2008年10月(455名回答)に、2回目は2009年1月(436名回答)に実施された。

3. 調査方法

調査にあたっては、C-Learningという携帯電話を

活用したシステムを使った。これは、教員があらかじめ用意しておいたアンケート項目に対し、学生が自身の携帯電話を使って回答するシステムである。回答は選択式にも自由記述にも対応している。特徴としては回答結果を回答者全員で即時共有できることであり、本調査結果も、クラス全体の結果として学生たちに即時共有された。この方式は学生にはおおむね好評である。その理由としては、アンケート結果をすぐに自分たちも見るができるため、アンケートで問われた事項について深く考える機会を彼女らに与えるからである。つまり、問題意識を滋養する効果がある。また、どこの誰が回答したのかわからない結果ではなく、今、ここにいる自分と自分の仲間が回答した結果であるため、結果に対する関心も高く、学習内容に対する動機づけの役割も果たせる。また、学生たちはこのシステムを別の授業でも使用していたため、扱いに慣れている者が多く、使用に関する困難はみられなかった。

4. 質問項目

質問項目作成にあたっては、電通育英会が2007年に実施した「大学生のキャリア意識調査」を参考にし、本学の学生に合わせて作成した。

電通育英会のアンケートは、専門にかかわらず広く大学生を対象とした奨学金付与のためのアンケートであり、大学生生活や就職活動の方法などは本学の学生に合わない部分も多くあったため、参考になりそうな一部を使い、それ以外の部分は本学の学生に合わせてこちらで文言を変更した。

授業開始時に授業担当者3名で、本学の学生の問題点を話し合ったところ、次の3点が見出された。「体育大学という専門性のはっきりした大学に進学しながら、その専門性の活かし方をわかっていない」「教員志望といいながら、そのための準備をしない」「4年生になっても、自分自身がどうすればいいのかわからないままにいる」である。

このような問題点と、「女性と仕事」という授業の目的である「学生に対する、大学生活や将来設計、就労意欲等への注意喚起」を総合的に考慮して、「入学動機」「就学意識」「就業意識」の3点から具体的な項目を作成した。

Ⅳ．結果と考察

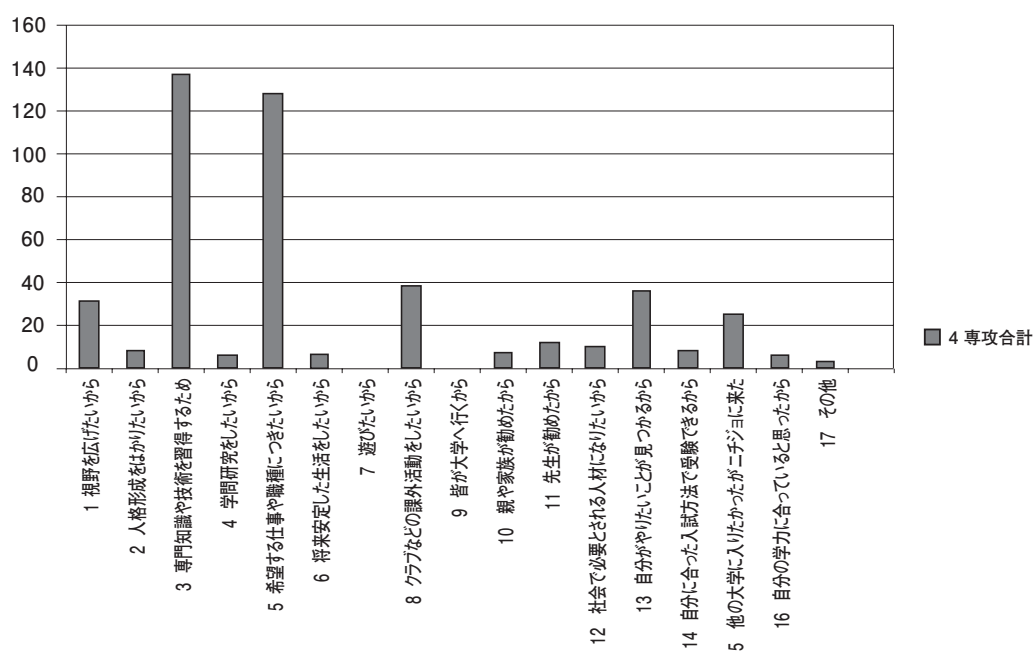
1. 入学動機

表1およびグラフ1の入学動機については、専攻に関係なく「専門知識や技術を習得するため」「希望する仕事や職種につきたいから」の二つが両者とも120

名を超える非常に高い値を示し、学生たちが大学を選ぶ際に将来のキャリアを強く意識していることがわかった。単科大学である本学に入学を希望するのであるから、当たり前だという意見もあるかもしれない。しかし、学生たちが大学を選ぶ理由には真面目な姿勢が感じられる。「遊びたいから」「皆が大学へ行くから」と答えた者は皆無であった。

表1：入学前にあなたが重視した理由を一つあげてください。

		スポ科	健スポ	幼児舞踊	4専攻合計
1	視野を広げたいから	9	11	11	31
2	人格形成をはかりたいから	5	2	1	8
3	専門知識や技術を習得するため	57	40	40	137
4	学問研究をしたいから	2	2	0	4
5	希望する仕事や職種につきたいから	51	53	24	128
6	将来安定した生活をしたいから	0	3	2	5
7	遊びたいから	0	0	0	0
8	クラブなどの課外活動をしたいから	24	12	2	38
9	皆が大学へ行くから	0	0	0	0
10	親や家族が勧めたから	4	2	1	7
11	先生が勧めたから	8	3	1	12
12	社会で必要とされる人材になりたいから	7	1	2	10
13	自分がやりたいことが見つかるから	14	9	13	36
14	自分に合った入試方法で受験できるから	4	1	3	8
15	他の大学に入りたかったがニチジョに来た	8	15	2	25
16	自分の学力に合っていると思ったから	1	3	0	4
17	その他	1	0	1	2
		195	157	103	455

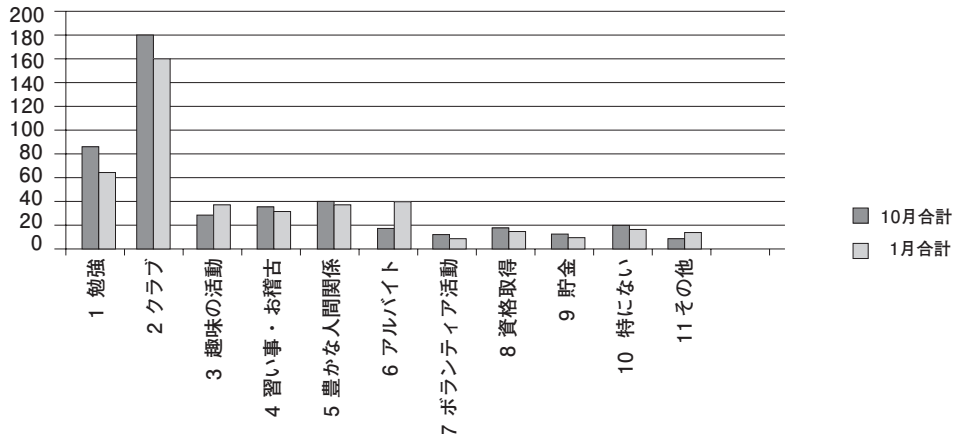


グラフ1：入学前にあなたが重視した理由を一つあげてください。

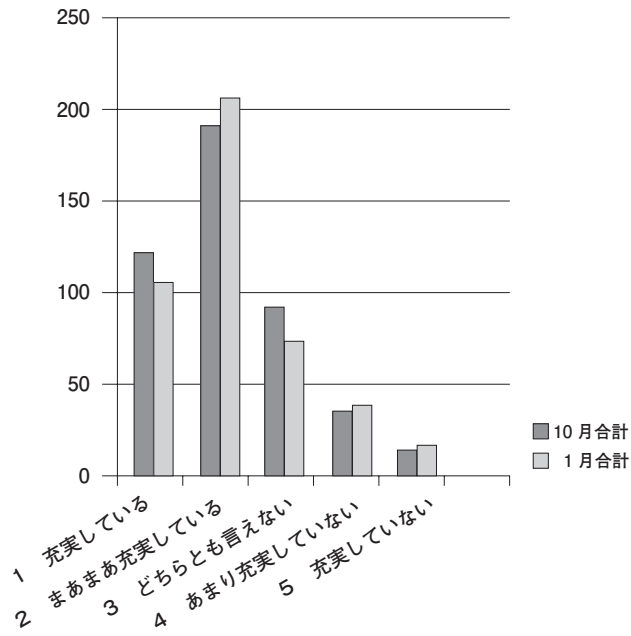
2. 就学意識

グラフ2から大学生活への意識については、基本的には両時期ともクラブ活動と勉強を中心とした大学生活を送っていることがわかる。10月に比べると1月のほうがやや怠慢な様子がうかがえるが、1年生の後期

になり大学生活にも慣れてきたのであろう。アルバイトに精を出す者も少し増えてきているようである。グラフ3の充実度に関しては、「充実している」と答えるものが少し減ったものの「まあまあ充実している」と答えるものが増えるなど、全般的にみれば充実した肯定的な大学生活を送っている様子がうかがえる。



グラフ2: 現在の大学生活の中で一番力を入れていることは何ですか。

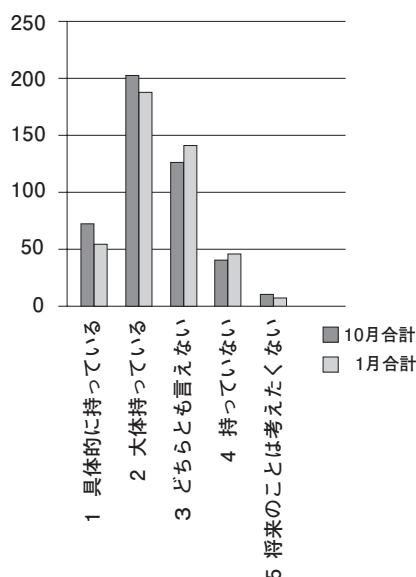


グラフ3: 自分の大学生活は充実していますか。

3. 就業意識

(1) 将来設計

グラフ4の将来設計については、10月よりもかえって1月のほうが、迷いが多くなっている様子が見えてくる。ゲストセッションでの人生談や「雇用形態とキャリア形成」「キャリア形成とライフスタイル」「キャリア形成と社会で求められている力」等の学習を通して現実社会の厳しさを知ったり、あるいは

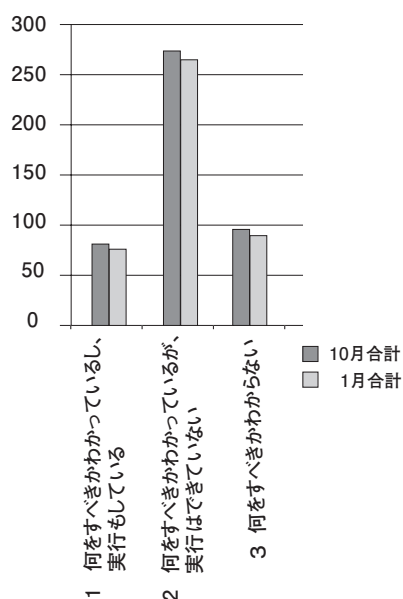


グラフ4：あなたは卒業後の自分の将来についての見通し(将来設計)を持っていますか。

(2) 希望する就業形態と就業期間

希望する就業形態については、グラフ6から「正規雇用の従業員として働く」という希望を3分の2以上の者が持っていることがわかった。昨今の経済状況の厳しさ、就業形態によって個人の生活の安定度がどれほど違うのか、等について報道や周囲から情報を得た結果、このような希望を持っているのではないかとと思われる。就業形態に関しては、授業で得た知識というよりは、もともと持っていた情報があるのではないだろうか。また、「音楽や芸術など個人の創作的な仕事を考えているので、就職する考えはない」と答えた者が1月のほうが増加していることについては、厳しい社会情勢を承知したうえで、自分自身の希望やこれまでの道のりを深く考えた結果、舞踊学専攻の学生が下し

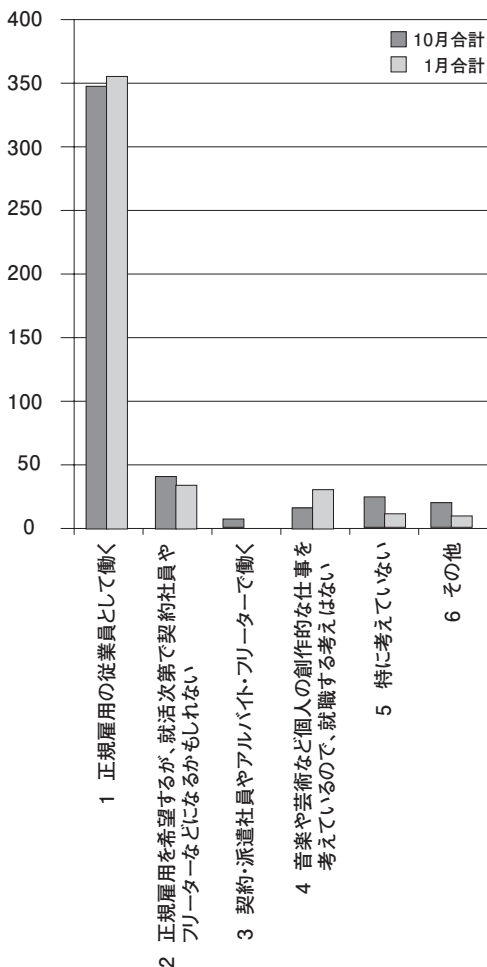
は、「自分を知る (1) (2)」やプレゼンテーションの準備などを通して、大学生活を送る中で自分の将来設計(将来の夢)の実現可能性について考えたりした結果なのではないかと思われる。また、グラフ5からは「何をすべきかわかっているが、実行はできていない」と答えるものが両時期とも過半数を超えていることから、大学生活と将来設計とを実践的に結びつけることに、多くの学生が困難を感じている様子がみえる。



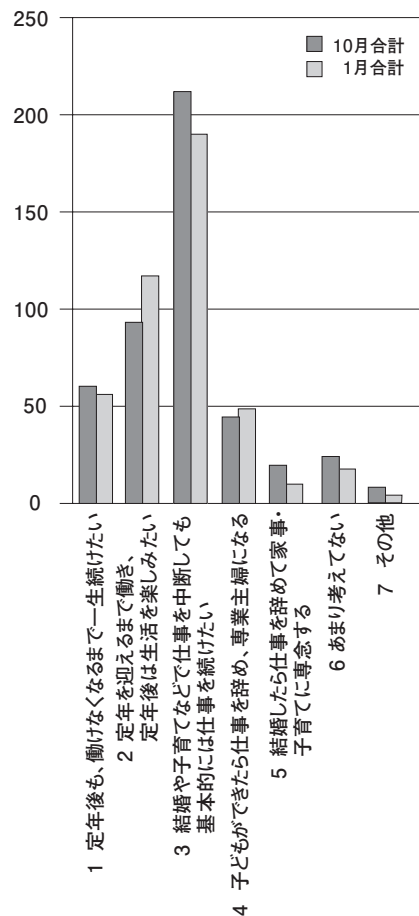
グラフ5：将来設計を現実のものとするために、今自分が何をすべきかわかっていますか。

た現時点での決断だと思われる。

希望する就業期間については、グラフ7に示されたように、「結婚や子育てなどで仕事を中断しても基本的には仕事を続けたい」と答える者が減り、「定年を迎えるまで働き、定年後は生活を楽しみたい」と答える者が増えた。また、「結婚したら仕事をやめて家事・子育てに専念する」が減り、「子どもができれば、仕事を辞め、専業主婦になる」が少し増えている。こういった変化は授業を通して、女性のライフイベントやワークライフバランスについての知識を得た結果、変化したのではないかとと思われる。M字曲線に代表されるような女性の就業率グラフや再就職の難しさ等は授業を通して初めて触れた情報だったのかもしれない。



グラフ6：今現在、どのような形で働きたいと考えていますか。



グラフ7：あなたが卒業後働くとして、仕事をいつまで続けようと考えていますか。

V. まとめ

2008年度学部1年生は大学に入学する時点で、将来を意識した大学選択を行っているようだ。また、大学生活にも真面目に取り組み、おおむね充実した生活を送っている。しかしながら、将来設計に関しては大学入学時に持っていたものに対し迷いが出てきている。しかも、その将来設計に対して、現在の大学生活をどのように結びつけたらいいのかわからず、そこに困難を感じている。将来の就業形態に関しては、正規雇用を強く望んでおり、また就業期間についても、その働き方に差があるとしてもかなりの者が長期間就業したいと望んでいる。特に女性としてのライフイベントと

仕事の両立をし、定年まで勤め上げたいと考える者が授業を通して増える傾向にあった。

授業の効果としては、学生に将来を考える上での判断材料の提供はできたように思われる。つまり、学生の未知を既知に変えることは可能だということである。（情報を得てから、方向転換をするかどうかは、学生の意志であり教員の扱う範疇ではないと考える）しかしながら、将来設計と現在の学生生活の結びつきを意識させることはなかなか難しいことがわかった。今後、取り組んでいきたい課題である。

また、アンケート内容の妥当性やこの報告形式についても改善を施し、よりよい調査報告を目指すことも今後の課題としたい。

謝辞

本研究および本研究が対象とした授業は、以下の二つの補助を受けている。

- 1) 平成20年度高度化推進特別補助・教育・学習方法等改善支援経費「『女子体育大学生の潜在能力を引き出すキャリア教育』のためのテキスト開発」
- 2) 平成20年度高度化推進特別補助・教育・学習方法等改善支援経費「自律的な学習者を育むための学習支援－携帯電話を利用し、学生同士の本音を明示化することから、協働的な人間関係を作る－」

また、本研究が対象とした授業では、本学の齊藤隆志准教授および本学キャリアセンターにご協力を賜った。御礼を申し上げたい。

【参考文献】

- 1) 仙崎 武, 藤田晃之, 三村隆男, 他編者 (2008). 「教育再生のためのグランド・レビュー キャリア教育の系譜と展開」 社団法人雇用問題研究会, 東京
- 2) 日本キャリア教育学会編 (2008) 「キャリア教育概説」 東洋館出版社, 東京
- 3) 宮崎冴子 (2007) 「キャリア教育 理論と実践・評価」 社団法人雇用問題研究会, 東京
- 4) 立教大学ビジネスクリエーター創出センターキャリアプロジェクトチーム (2005). 「キャリア意識に関する調査報告書」 立教大学大学院ビジネスデザイン研究科, 東京
- 5) 電通育英会「大学生のキャリア意識調査2007」
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/top.html>,
2008年9月12日アクセス

(平成21年9月10日受付)
(平成21年12月16日受理)